

ARAI NEWS

Actual Story From Inside.



今では何も言わなくても、「レースに使うならばアライが良い」そんな噂を聞かされてロブ・マッケルニア、ロン・ハスラム等ワールドGPのトップクラスライダー達までが、是非ともアライを使わせてくれ、と言ってきて下さるようになりました。「レースに使うならばアライ」の言葉は、人には見えない地道な努力が、いつしかカタチとなった結果かもしれません。10数年前、アライがレース活動に本格的に参加するようになった当初を思えば夢のような話です。

今でも多くの場合、そのままの姿で残っているようですが、アライでも、10数年前はレーサー用に特別なヘルメットを作っていた時代がありました。オートバイで、市販車とファクトリーレーサーは全く別物のように、レーサーのヘルメットは市販品とは違ふ、特別に成形した物で作るのが、世界中どこでも当り前の時代でした。例えば、帽体一つとっても、一般市場に出回る商品の90%以上は、事故に合う事はまず無い。だから、見てくれだけは大切にしても、安全性については少々気をぬいて作る。それに反して、レーサー用はいつも転倒と背中合わせ。そういった緊張感から、成形部門で作られる検査されたものを、開発、レース部門のスタッフに、更にもう一度入念にチェックしてから使う、そのような事をしていったのです。

事故に合えば一般の道路だってレース場と同じではないか。作る人も、レース用ヘルメットを作るときは緊張しながら作るのに、一般の市販品を作る時は通常の定型作業の連続でしかない。これでは、いつまでたってもアライ製品は良くならない。作っている人間もアライをつくる喜びを失ってしまう。これは絶対に間違っている。ヘルメットにはファクトリーレーサーに必要な、レーサー用も市販品も同じであるべきだ。これがキツカケでした。そして、レーサー用と一般市販品の間には区別なく、例えどんな有名なレーサーでも一般ラインに流れている物、検査のマークを確認するだけで、そのまま使って頂く、そんなアライのポリシーが確立されたのです。

大抵の事ではありませんでした。まず、安全面ではレーサーの転倒キズを分析し、規格のテスト範囲外であっても転倒例の多いスツの方は、しっかりと設計にする。そして、決して間違つたものが出ないよう、帽体の厚み一つとっても、まず成形部門で全数検査を行ない(多くのメーカーでは今だ抜き取り方式でやっているようです)、合格した物だけを完成帽体として扱う。その一度合格したものを更に、品質管理部門の検査員が再度、厚みの全数検査を行なう。この莫大な手間がかかるダブルチェック方式が、アライのポリシーを実践するために行われるようになりました。同時に、カットラインや、内装のフィット感も、どんなレーサーが被っても一発で納得して下さるようなものにする努力を続けてきました。

アライを作る人にしても、どの一つが実際のレースに使われるようになるかわからない。だから、どれをとられても大丈夫にしなければならぬ、作る人誰もが、レースに参加していかのよう緊張感を持ってヘルメットを作るようになったのです。

でも、実際の話し、帽体のダブルチェック一つにしても大変手間のかかる事です。社内でも当初、他のメーカーはどのもやっていない、塗装してしまえば分らないところに、何でそんなに苦勞しなければならないのだ、という声も上がりました。しかし、安全なヘルメットを作ろうとする努力は天知る、地知る、いつかお客様にも分かってく頂けるだろうと信じ、続けてきました。そして、そんな努力を10数年続ける内、どの一つにも気を抜かないと誓う心構えが、アライを作る人々に浸透しました。勿論、その精神は今も生き続けています。そして、それがアライの財産です。どんな名曲も、要者にながなければただの音になるのと同じ、作る人にながなければ、決していいヘルメットは出来ません。これからもアライは、一人一人が気持ちを引締め、いい曲を演奏する気でヘルメットを作り続けます。世界の人の信頼に答える為に。

